

第9回 鳥取まいぶん講座

因幡の中世城館

— 因伯の境目の気多郡を中心に —

令和元年12月21日
埋蔵文化財センター

今回お伝えしたいこと

(1) 境目の気多郡など、緊張状態が高い地域には山城が多い。

(2) 天正8・9年の秀吉軍の鳥取城攻めまでの因幡前史において、

- ①尼子再興戦の影響や毛利の影響力の低下、山名豊国の武田高信、毛利方への巧みな対応。
- ②天正7年の羽衣石城の南条氏の毛利陣営からの離反と毛利方の荒神山城の拠点化が気多郡にも大きな影響を与えた。

(3) 狗尸那城は、

- ①亀井茲矩が鹿野城に入城する前の一時期、鹿野城と呼ばれた時期があった。
- ②但馬山名→毛利方→亀井氏の関与が想定されるが、因幡にはない技巧的な山城構造。
- ③天正8・9年の織田毛利戦争でも重要な役割を想定、亀井氏の鹿野城入城後も狗尸那城として機能。
⇒鹿野城関連城郭として史跡指定も想定。

はじめに

(1) 中世城館調査の歴史

- 1818(文政元)年 郡絵図と因伯古城跡図志を作成。
因幡68城 伯耆33城
- 1998～2003(平成10～15)年度に悉皆分布調査の一環で実施。
⇒因幡292城 伯耆212城
- 遺漏や錯誤、成果の検討も不十分で、今回の再調査をスタート。

(2) 今回の調査研究

①目的

9月1日考古学フォーラムでご説明

②進め方

- ・中世城館調査は、文献や絵図、地籍図の調査、縄張り調査、発掘調査 など多様な方法により各分野で実施
 - ・当センターでは、
 - 現地踏査による縄張り調査が中心(必要に応じて発掘調査)
 - 他県の発掘調査成果を参考
 - 先行研究を参考、県内外の研究者、文献や絵図等の専門家から指導助言
- 枠にとらわれず学際的に、大胆かつ積極的に進めています。
- また、調査対象とした中世城館については、なるべく皆さんを現地に案内します。

(3) 再調査の成功祈願

・郡代加藤主馬は郡絵図と古城跡絵図の作成を命じ、文政元年に完成させた。

・加藤は地方の田畑の大改革を行い、文政元年には田畑字限画図、田畑地続帳を完成して耕地整理、農政改革に大功を立て、家老格にまで列せられた。

・加藤家が知行地としていた国府町吉野に見事な自然石の墓が建てられている。
(『国府町誌』より)



加藤主馬墓碑(鳥取市国府町吉野)

戦時の緊張と城の分布

○城館の密度(城館数/km²)

旧市町村単位

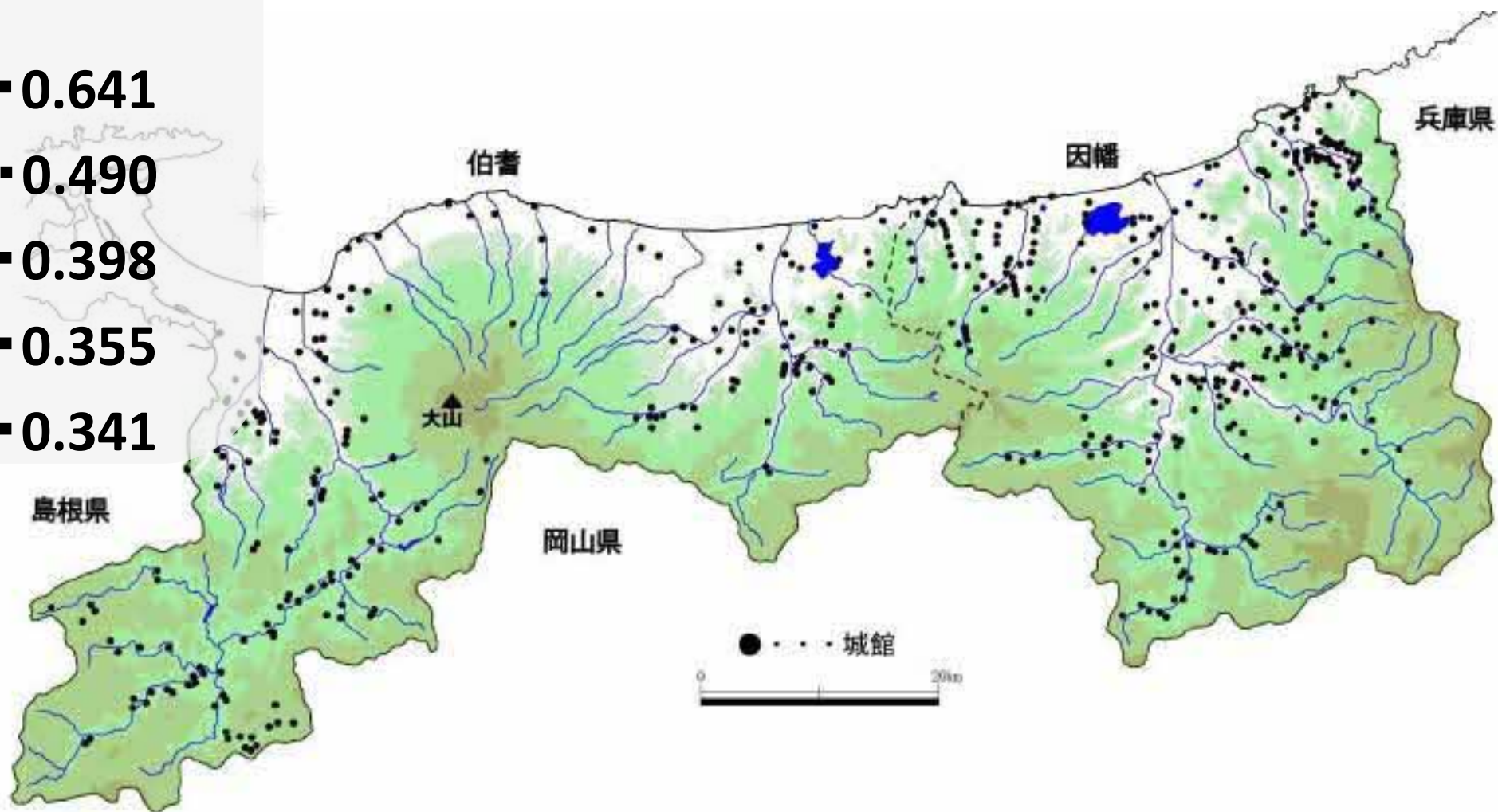
第1位 気高町・・・0.641

第2位 **岩美町**・・・0.490

第3位 郡家町・・・0.398

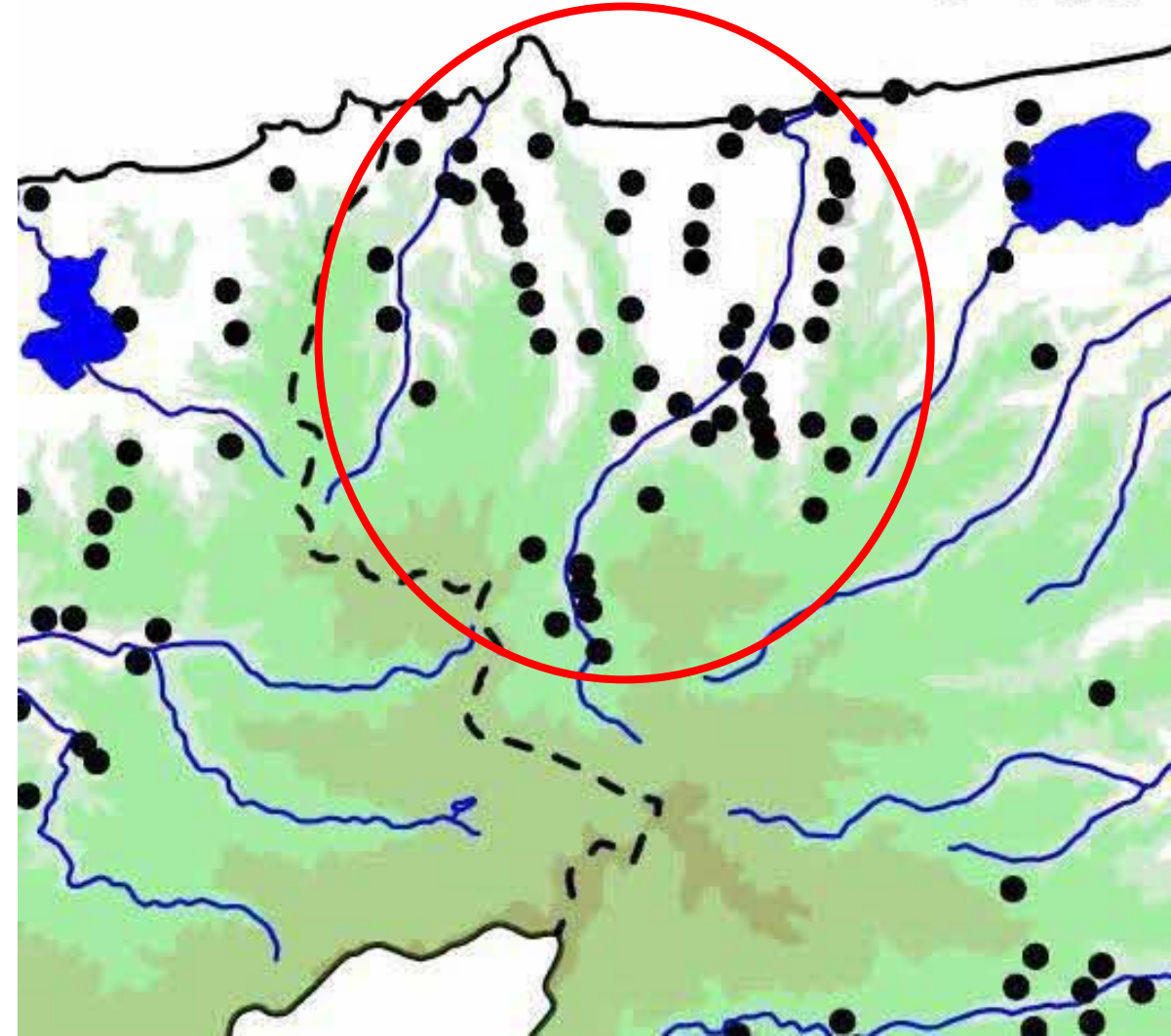
第4位 会見町・・・0.355

第5位 鹿野町・・・0.341

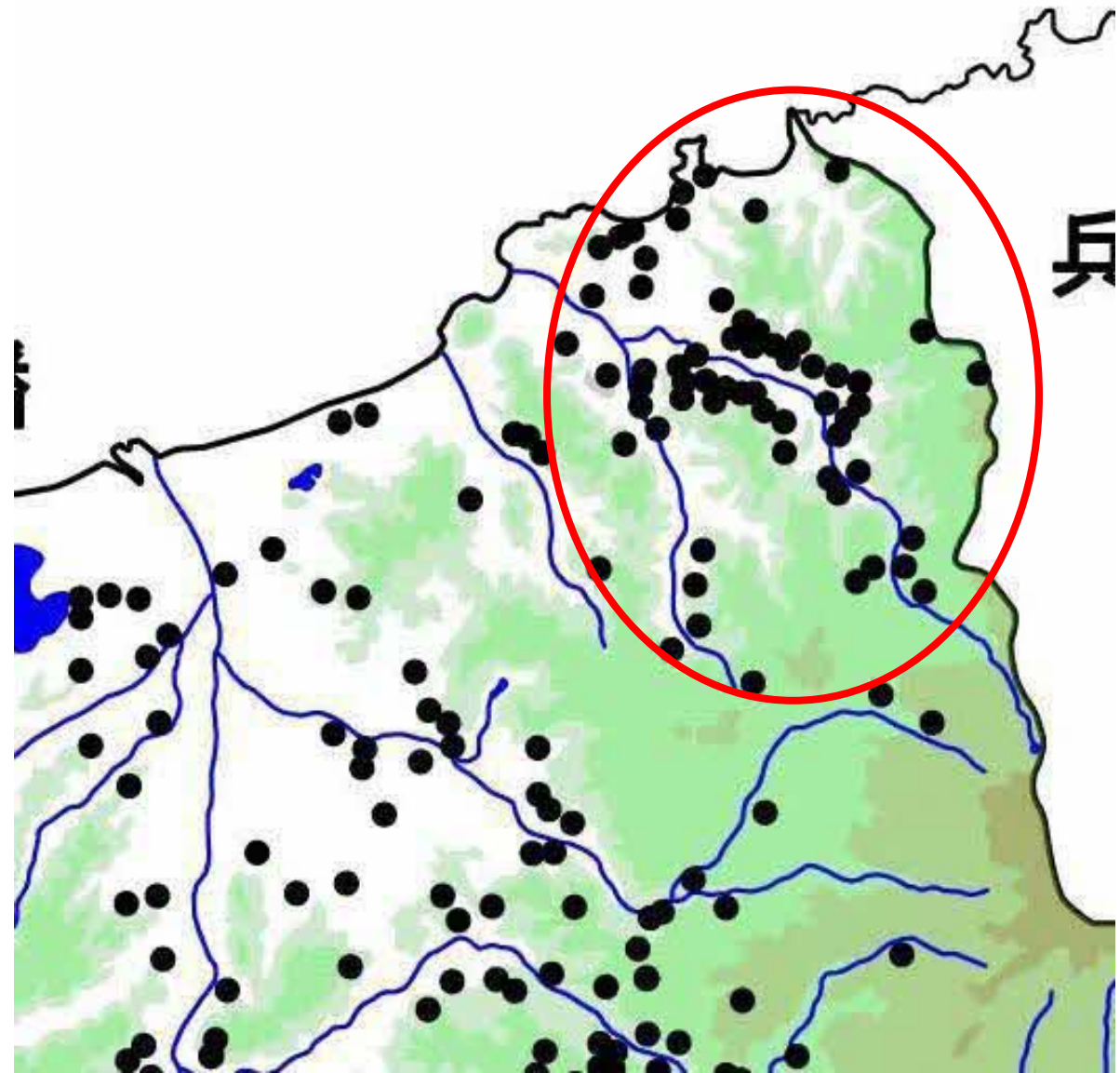


因幡・伯耆の境目 気多郡
(気高町・鹿野町・青谷町)・・・58

因幡



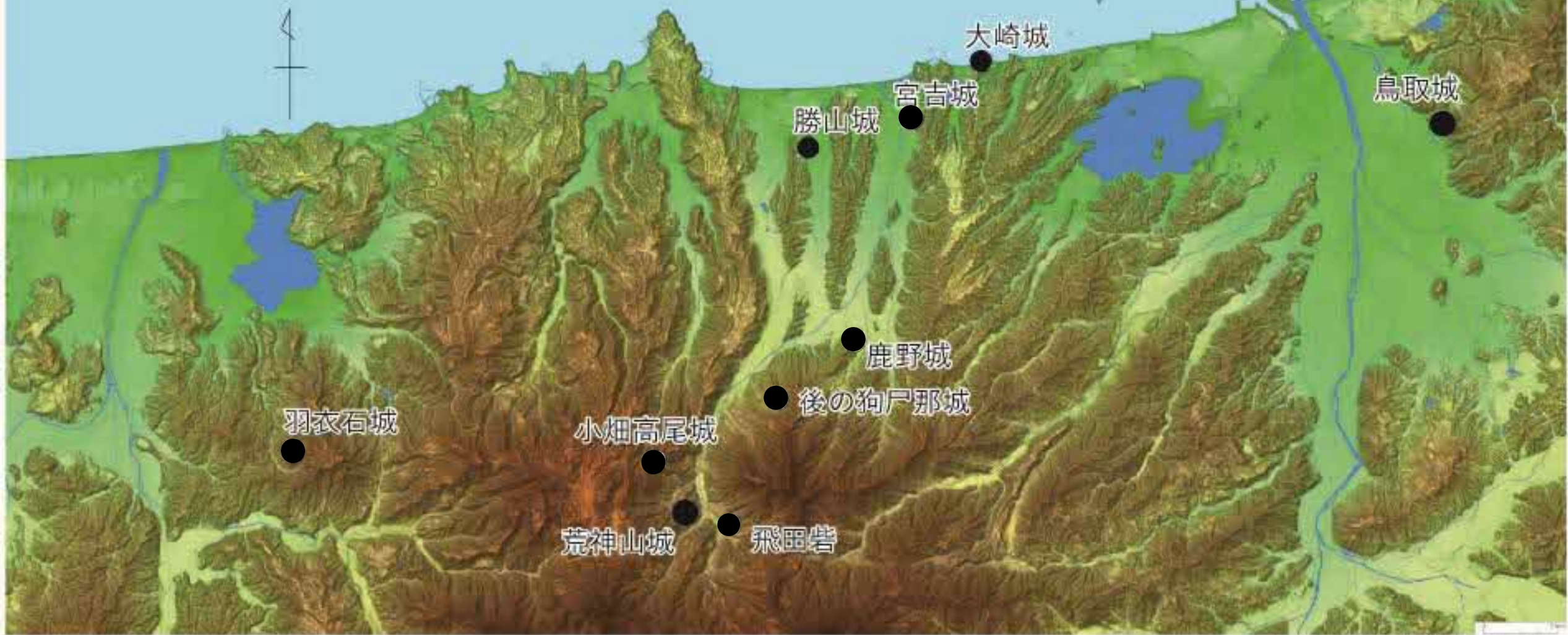
因幡・但馬の境目 巨濃郡
岩美町・・・60



←毛利方
(馬ノ山)

織田方⇒
(但馬)

境目



羽衣石城

小畑高尾城

荒神山城

飛田砦

勝山城

宮吉城

大崎城

鹿野城

後の狗尸那城

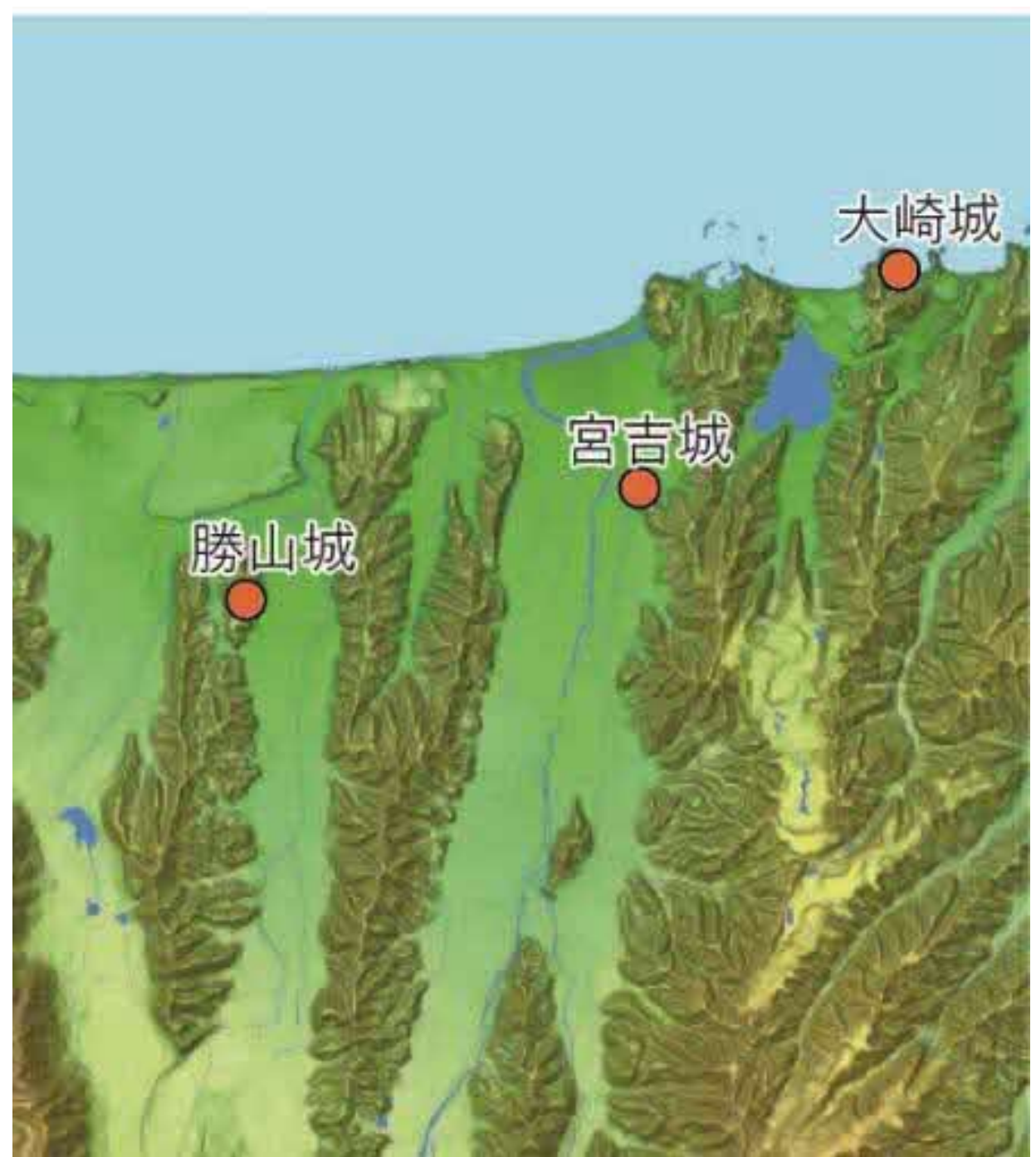
鳥取城

● 毛利方の城 ○ 織田方の城

宮吉城

- 主郭南端にL字形の土塁(高さ1.2m、幅3.5m)
- 「気多郡母木村繪図」に内堀、そと堀
- 田公氏在城
- 海上交通の要
- 毛利氏関連

一時期亀井氏により調略



勝山城

- 長大な曲輪
- 北端から日本海を望む眺望
- 随所に設けられた豎堀
- 毛利方の付城



荒神山城

- 長大な主郭(長さ170m×幅25m)
- 峠道(滑石峠、佐谷峠)を押さえた国境の城
- 眼下の河内谷、北側(日本海)への眺望
- 毛利氏による拠点化
- 織豊系の特徴無し
- 関連資料(備前焼徳利、矢田城主の遺品地元に)



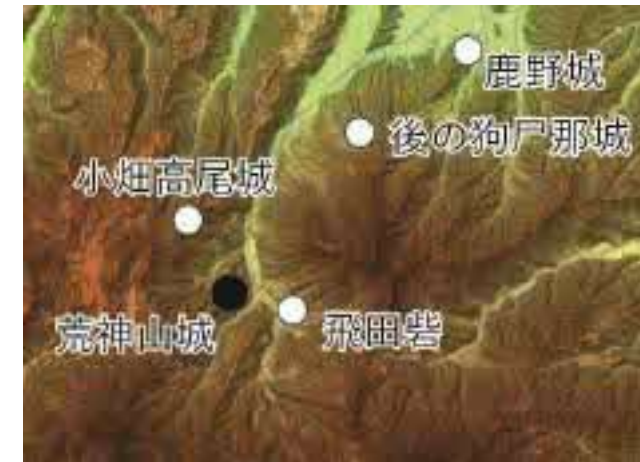
小畑高尾城

- 方形にめぐる低土塁(高さ0.3m程度、幅1.5~2.0m)
- 虎口、櫓台か
- 削平の甘い平坦面
- 織田方の陣城か
- 荒神山城が見える



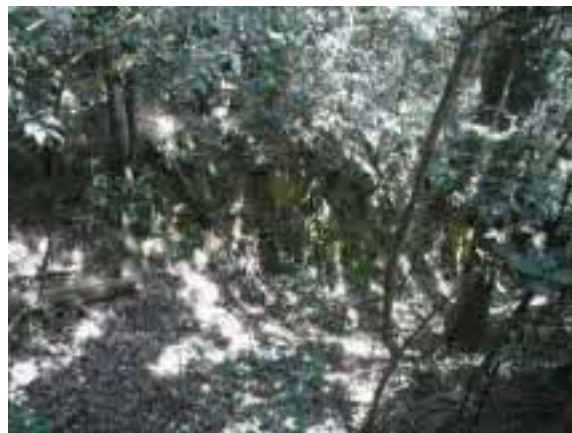
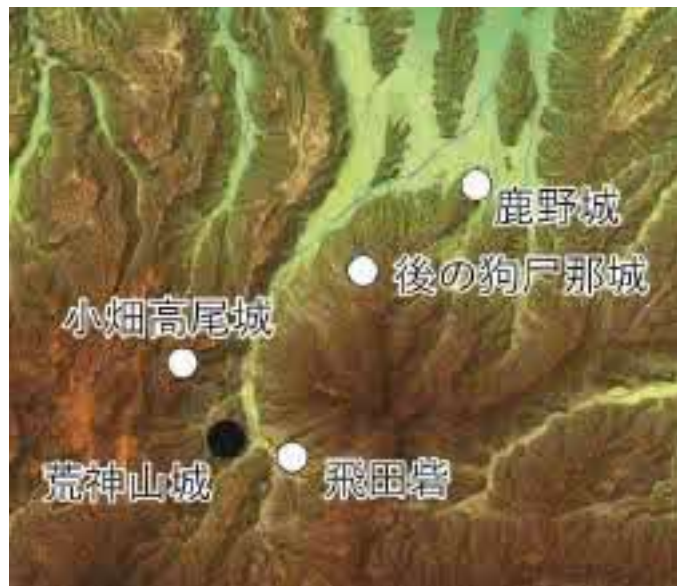
飛田砦

- 三辺に土塁、浅い堀めぐる
- 土塁内は自然地形を残す
- 織田方による陣城か
- 荒神山城が西正面に見える



鹿野城

- 山頂から北側は近世城郭に改修
- 鞍部の東谷に豎堀
- 流山の堀切
- 毛利氏の荒神山や海岸部の付城は見えない
- 志加奴入道→(古城)→毛利再建
→亀井改修



狗尸那城

- ・ 主郭 I、曲輪 II～IV
- ・ 横堀(曲輪 IIIの北西)
- ・ 横堀に接続する竖堀
- ・ 荒神山城は見えない。

毛利氏の海岸部の付城見える

- ・ 因幡有数の技巧的城館
- ・ 但馬山名→毛利→亀井の関与

- ・ 立地: 対荒神山城の前線基地か

毛利氏の付城、勝山城、大崎城、宮吉城への押え



二つの鹿野城

- 「鹿野城の所在不明」、訝かる向きもあろうが、同城はある時期複数存在したらしい(並列はしていない)。(引用 高橋正弘1986『因伯の戦国城郭』)
- “鹿野”という名称で、特定の城を固定的に考えるのは危険。

(引用 高橋正弘1986『因伯の戦国城郭』)

- 近世初頭の村切以前 河内・鷺峯は鹿野郷

近世の村は村請制といわれ、年貢収納、夫役の調達、村内の治安維持にいたるまで、すべてが村を基本にした連帯責任性がとられたが、その村は中世的な系譜を引く村落ではなく、近世に入って村切りがなされ、行政単位となる村が作られた。

- 『因幡国気多郡高草郡郷帳』(慶長10年)に「鹿野」、「町分」の記載
→河内・鷺峯は中世期に鹿野と呼ばれても不思議でない。

鹿野郷

<p>物成合千五百五拾石也</p> <p>高千貳百九拾四石六斗六升一合</p> <p>内田數百貳町五反二畝十七步</p> <p>内田數五町九反四畝四步</p> <p>物成合千五百石也</p> <p>高千六百四拾石七斗五升四合</p> <p>内田數百貳拾町七反四畝十四步</p> <p>内田數三拾六町四畝四步</p> <p>物成合千三百七拾石也</p> <p>高千九百四拾七石九斗六升九合</p> <p>内田數六拾九町九反壹畝十六步</p> <p>内田數五町壹反七畝廿二步</p> <p>物成合八百拾石也</p> <p>高千貳百五拾石六斗三升六合</p> <p>内田數七拾四町八反七畝五步</p> <p>内田數九町六反三畝廿三歩</p> <p>物成合千百石也</p>	<p>物成合千五百石也</p> <p>高千七百五拾石七斗</p> <p>内田數百拾町五反四畝廿壹歩</p> <p>内田數貳拾町五反三畝廿三歩</p> <p>物成合千五百貳拾石也</p> <p>高千四百五拾石七斗六升一合</p> <p>内田數八拾五町二畝廿七歩</p> <p>内田數四町九反五畝廿二歩</p>	<p>物成合四百七拾石也</p> <p>高千三百三拾七石貳斗四升</p> <p>内田數八拾六町五畝廿貳歩</p> <p>内田數拾町八反七歩</p> <p>物成合九百石也</p> <p>高八百七拾四石五斗八升五合</p> <p>内田數六拾町貳反七畝六歩</p> <p>内田數拾八町貳反九畝十四歩</p> <p>物成合七百七拾石也</p>	<p>物成合二百七拾石也</p> <p>高五百貳拾八石壹斗四升六合</p> <p>内田數三拾六町三反十三歩</p> <p>内田數五町六反</p> <p>物成合四百七拾石也</p> <p>高千七百五拾石七斗</p> <p>内田數百拾町五反四畝廿壹歩</p> <p>内田數貳拾町五反三畝廿三歩</p> <p>物成合千五百貳拾石也</p> <p>高千四百五拾石七斗六升一合</p> <p>内田數八拾五町二畝廿七歩</p> <p>内田數四町九反五畝廿二歩</p>
下勝見	大坂	上坂下	下坂本
町分	光本	宮吉	鹿野



高千七百五拾石七斗

内田數百拾町五反四畝廿壹歩

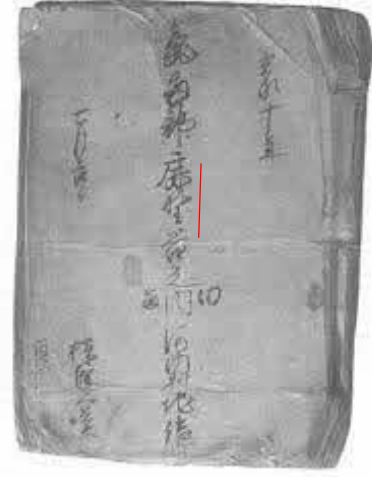
内田數貳拾町五反三畝廿三歩

物成合千五百貳拾石也

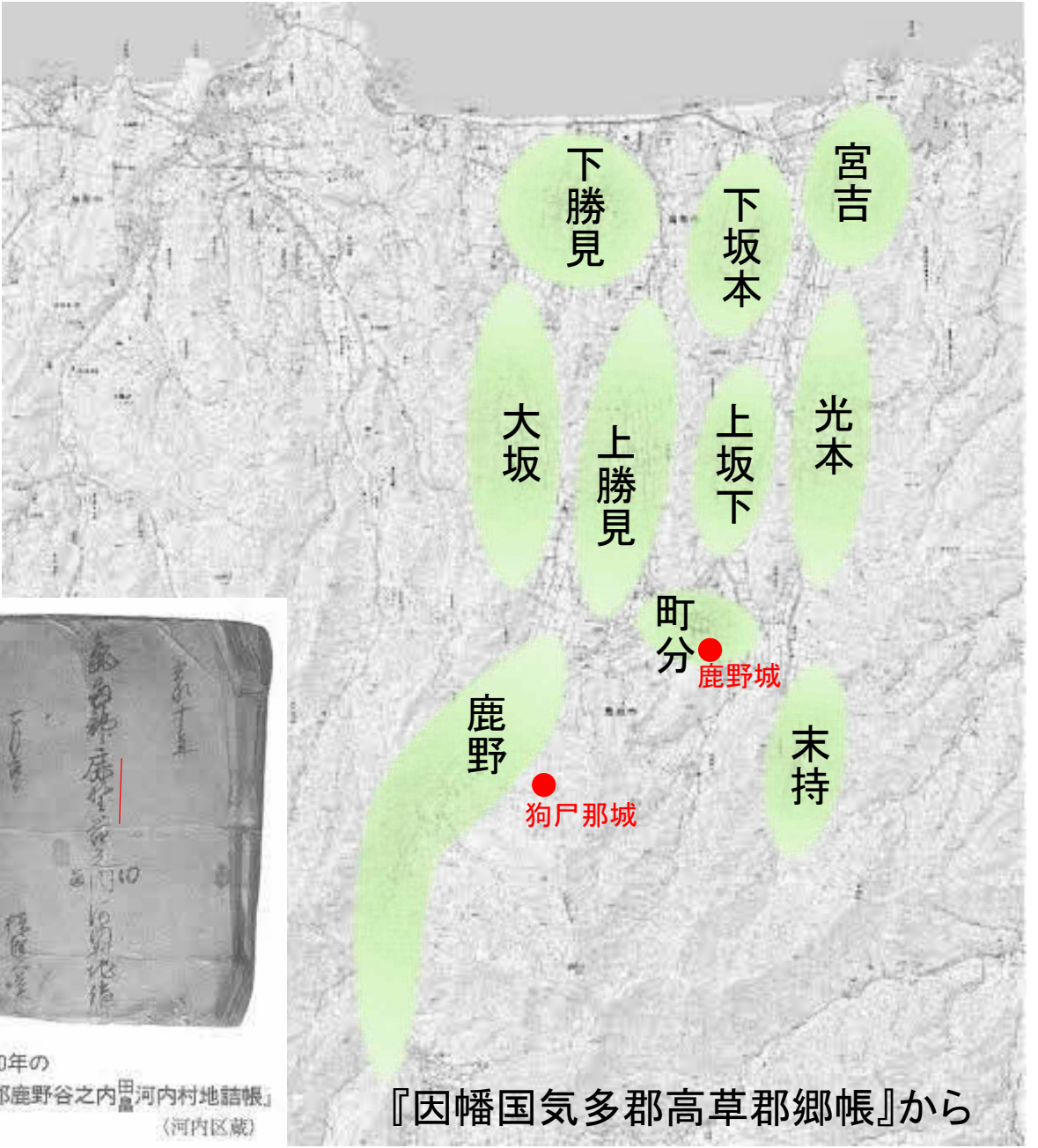
高千四百五拾石七斗六升一合

内田數八拾五町二畝廿七歩

内田數四町九反五畝廿二歩



寛永10年の
『気多郡鹿野谷之内田河内村地詰帳』
(河内区蔵)



『因幡国気多郡高草郡郷帳』から

『因幡国気多郡高草郡郷帳』(鳥取県立博物館所蔵)
鹿野町誌編集委員会1992『鹿野町誌』上巻 鹿野町

少なくとも永禄期を中心とする時期に別の鹿野城が機能しているらしい

- 現鹿野城が古城化していた時期があったことは1次史料に見えるが、古城化する時期としては、天文13年の尼子軍による鹿野城攻略後とする見解に加え、近年では天文15年の尼子氏による戦略的破壊の可能性も指摘されている。(高橋正弘氏「戦国因幡と武田一族—中編—」)
- 古城化した現鹿野城に代わり得る城郭は、立地や縄張り等から見て、鹿野所在城の中では狗尸那城と荒神山城しか考えられない。史料上における名称が安定していること、立地から来る逆の観点などから見て荒神山城は外してもいいと考えられる。→後の狗尸那城は当時の鹿野城。
- 「因幡誌」には狗尸那城に山名弾正が居城したとあるが、但馬山名が因幡山名を倒して因幡を傀儡化し、因幡山名氏滅亡前後に因幡に派遣された山名豊定(但馬守護山名祐豊の弟)の官途を弾正小弼・弾正大弼とする2次史料(「寛政重修諸家譜」)もあり、ある程度の整合性が認められる。

- なお、戦国時代の鹿野には但馬守護家山名氏に属する山名一族が領主として君臨し同時に気多郡を統治しており、気多郡に但馬守護家の勢力が扶植されていたとされる。(小坂博之「因幡鹿野城の発掘」『中世の考古学』)
- 1次史料では元亀2年に武田高信が鹿野新山から小畑に出陣し合戦したとあるものが、「因幡誌」では元亀天正の頃、小畑高尾城が狗尸那城の山名弾正と攻め合いとある。山名弾正などの但馬山名勢は、既に毛利勢により永禄8年頃には因幡を退去しており、狗尸那城は王舎城、金剛城といった領内の城や河川と同様に、亀井茲矩が仏教に因んで付けた名称であり、亀井茲矩が鹿野城に入城する前は狗尸那城と呼ばれていたはずはない。後世に狗尸那城と呼ぶようになった城は、当時因幡では鹿野新山と呼んでいたものと推測され、両城の位置関係から見ても妥当であると考えられる。なお、因幡の国外の人たちからは従前のおり鹿野城と呼ばれていたのではないかと推測される。

尼子因幡ノ國發向之事
翌アレハ天文十三年二月中旬尼子修理大夫晴久始領民部大輔今年改修理大夫其國ノ軍士
三萬餘騎ヲ引帥テ八幡ノ城ニ著テ爰ニ暫時逗留セテ初夏ノ北國發向ニ發向セテ
レハ兼テ其威風ニ恐惶シ夫時ノ城ノ城地ニイテテ明ク思ハク其レヨリ國野城ヲ取リ
キ一時カ間ニ乘リ破リ則野入道已下三百餘人ヲ頭ヲ切テ大ニ勇々悦ヒテ鳥取ノ山下ヲ放火
シテ城ヲ私取コソ一城ヲ攻テ中ノ敵兵共ニ皆散亂キヤト退散スヘキトテ軍評定
者ヲテ所ニ請久ノ命公以テ外ニ稱シ付キテ城ヲ及テ由注通領セケレハ同五月上旬
朝國ヲ立テ州ニ歸リ給ヘキト

香川正矩編『陰徳太平記』

九五〇 武田高信書状写 山田家古文書 五

去十五日從鹿野新山至小畑罷出候処、御家来衆則時被懸
合、敵数多被討捕之段、寔連々御心遣之故、於我等本望候、
何茂自是以使者可申入候、委細同名丹後守可申候、恐々
謹言、

十一月十七日 武田 高信 花押

山田出雲守殿 御返報

○本文書は年未詳であるが、永祿九年〜元龜三年の間に書かれた
ものと推定されるので、しばらくここに収める。

九七〇 毛利輝元書状 (折紙) 野村家文書

因伯為仕切之城、鹿野古城可取付候と申事候、就夫最前
如申聞候、彼城可在番事肝要候、普請之儀者則可出来候
之条、其方支度不可有油断候、猶從両三人可被申候、謹言、

九月廿六日 輝元 (花押 675)
(天正元年) (土悅) 野村信濃入道殿

○狗屍那城 村の下にある竹山なり山名彈正と云ひし

國侍居城せしと小畑高尾の城主嶋崎某と
攻合ひしかとも互に勝負決せざりし處に
鹿野の龜井氏に攻破られ斷絶せりとなり
城の下を古佛谷と號す
鷲峰の出村有て兩村の間の山なれば古佛
谷の城とも云ふ今は禁山となり竹林鬱葱
として搦の様子知れず

安陪恭庵『因幡誌』世界聖典刊行協会1981

鳥取県『新鳥取県史資料編』古代中世古文書下 2015

これを分かりやすく整理すると、

出典	年代	当事者	合戦した両城	
一次史料	元亀2年	武田高信	鹿野(新山)	小畑
二次史料(因幡志)	元亀天正の頃	山名弾正	後の狗尸那城	小畑高尾城

また、地形図で両城の位置関係を見ると、



・2次史料における口碑伝承を考慮すると、

ある時期の鹿野城＝後の狗尸那城

2つの鹿野城になると、歴史はこう塗り替わる

- 戦国時代後期における鹿野城及び関連城郭など因幡の主要城郭の動向(PDF)

その後の鹿野城

- 鹿野古城は天正元年に毛利輝元が、鹿野城(後の狗尸那城)在番の野村士悦に、「因伯仕切りの城」として再建命令
- その後再建された鹿野城(現在の鹿野城)は亀井茲矩が近世城郭に改修
関ヶ原の役の後、慶長6年から12年にかけて近世城郭として天守から城下町までを一気に建設した。(『中世の考古学』「因幡鹿野城の発掘」小坂博之)

終わりに

○今後、当面の調査研究は、

- 鹿野城の中世遺構を再度現地踏査
- 鹿野城、狗尸那城の取付に関与した可能性のある者、類似の遺構がある山城を調査
- 東伯耆の山城の現地踏査

○来年3月以降、地元との協働で山城の現地案内を再開

現時点ではまだ調整中ですが

- 因幡 天神山城周辺・出城、狗尸那城、鹿野城(中世部分)、勝山城、鷹山城
- 伯耆 岩倉城、市場城、打吹城、茶臼山城、黒坂城

今回お伝えしたこと

(1) 境目の気多郡など、緊張状態が高い地域には山城が多い。

(2) 天正8・9年の秀吉軍の鳥取城攻めまでの因幡前史において、

- ①尼子再興戦の影響や毛利の影響力の低下、山名豊国の武田高信、毛利方への巧みな対応。
- ②天正7年の羽衣石城の南条氏の毛利陣営からの離反と毛利方の荒神山城の拠点化が気多郡にも大きな影響を与えた。

(3) 狗尸那城は、

- ①亀井茲矩が鹿野城に入城する前の一時期、鹿野城と呼ばれた時期があった。
- ②但馬山名→毛利方→亀井氏の関与が想定されるが、因幡にはない技巧的な山城構造。
- ③天正8・9年の織田毛利戦争でも重要な役割を想定、亀井氏の鹿野城入城後も狗尸那城として機能。
⇒鹿野城関連城郭として史跡指定も想定。

企画展示 因幡の中世城館

企画展示では、天正8、9年ごろとそれ以前の気多郡の城館について、今年度、当センターが実施した城館踏査、文献調査から現段階で分かった気多郡の城館の特徴、各時代にどの勢力下にあったのかを説明しています。

展示から尼子氏、山名氏、毛利氏、織田氏の大勢力の中で生き残りを掛けた当時の気多郡の城主たちの様子を想像して、ご覧ください。

今回限定で「狗尸那城」の謎を解く鍵になるかもしれない古地図「鷲峯村絵図」も展示しています。



「鷲峯村絵図」一部



○ 織田方の城

● 毛利方の城

展示中世城館・解説パネル目録

【展示中世城館】

城館名	所在地
鹿野城	鳥取市鹿野町鹿野
狗尸那城	鳥取市鹿野町鷲峰
小畑高尾城	鳥取市鹿野町小畑
飛田砦	鳥取市鹿野町河内
荒神山城	鳥取市鹿野町河内
勝山城	鳥取市気高町勝見
大崎城	鳥取市気高町奥沢見
宮吉城	鳥取市気高町宝木

【解説パネル】

パネルテーマ	内 容
西いなばの遺跡と歴史	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の地形変化に伴う遺跡の変遷と歴史紹介
毛利の尼子攻め以降における尼子・毛利の因縁の対決とその余波	尼子氏滅亡後の尼子再興戦、そして、南条氏、因幡武田氏を含む因伯への影響について紹介
鹿野所在城の文献調査、縄張り調査、地表面調査について	当センターの調査により分かってきた鹿野城、鹿野城下の成立と狗尸那城について紹介
因伯古城図志について	「因伯古城跡図志」が作られた背景や取り扱いについて紹介
因幡国人武田高信	因幡を代表する国人 武田高信の波乱に満ちた生涯の紹介
鶴尾城と因幡武田氏	武田高信の居城 鶴尾城の紹介
古代山陰道の調査研究事業	当センターが実施している「古代山陰道」の調査成果の紹介

御静聴ありがとうございました。